

発掘たより No. 2

1 中世以降の掘立柱建物跡と柵列などを発見

4月から真光寺遺跡を調査し、第1調査区では松本市波田地区で初めてとなる古墳が発見されました。引き続き9月から調査した第2調査区では、掘立柱建物跡や柱穴を伴う溝跡や溝跡に沿うよう土坑群などが検出されました。

掘立柱建物跡は、柱穴が約1.8m間隔で並ぶ2間×2間の掘立柱建物跡ですが、柱穴はさらに来年度の調査区に伸びる可能性が考えられます（写真1）。柱穴を伴う溝跡は、幅約20cm、深さ約10cmの溝跡の内に約0.7m～1.8m間隔で柱穴が並んでおり、柵列もしくは塀と考えられます（写真2）。この溝跡は、「永楽通寶」（初鑄年：1411年）が出土した土坑（SK127）と同じ規模、同じ埋土の土坑（SK132）に切られていることから、「永楽通寶」が使用された中世の遺構と考えられます（写真2左）。

また溝跡に沿うように11基の土坑（柱穴）も確認されました。土坑の間隔は約2.3m～3mです。この土坑は浅く、粗い砂で埋まっています。溝跡との関連は、今後の検討課題です（写真2）。



図1 真光寺遺跡の調査区（紫色丸：現在の真光寺）



写真1 発見された掘立柱建物跡（白線）
【図1 赤色丸内】

2 中世の「火葬施設」を発見

今年度調査区のなかで、もっとも現在の真光寺に近い場所から、焼土、炭化物、焼骨（人骨か）が出土した穴が2基、そのほかに骨が出土した穴が5基確認されました。穴の中から出土した銭貨と、隣接する土坑から内耳土器が出土したことから、中世と考えられます。焼土、炭化物、焼骨が出土した2基の穴（SX12、SX13）は、東西約75cm、南北約80cm、深さ約20cmの隅丸方形または円形で、穴の壁は赤く焼けており、炭化物（炭化材）も比較的良好に残っていました（写真3）。また、焼骨の残り具合も良好で、穴（SX12）からは3枚の銭貨が重なる状態で出土しました（写真4）。銭貨の種類はわかりませんが、字体から宋銭と思われます。

これらの穴は、長野自動車建設に伴う松本市北栗遺跡、北方遺跡などの調査例から、遺体を焼却した「火葬施設」と考えられます。

こうした真光寺に近い場所は、中世頃には居住空間や墓地空間に利用されていたようです。来年度はさらに近い場所を調査するので、真光寺との関連を解明したいものです。

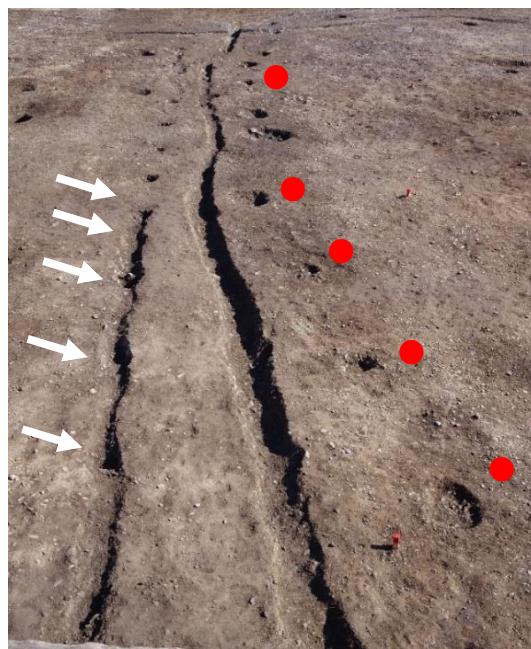


写真2 柱穴を伴う2条の溝跡（柱穴：白矢印）と溝跡に沿う土坑（赤色丸印）
【図1 青色楕円内】



写真3 SX13 焼土、炭化物、焼骨（矢印）出土状況 【図1 黄色丸内】



写真4 SX12 銭貨の出土状況（矢印）
【図1 黄色丸内】

真光寺遺跡 発掘たより No.2
発行：長野県埋蔵文化財センター
調査担当：西山・寺内・春日
発行：令和3（2021）年12月6日
HP：<http://naganomaibun.or.jp/>